

⑦

次の文章を読み、著者の視点を踏まえた上で、音楽を言語で説明することについてのあなた自身の意見を述べなさい(字数制限なし。1枚で書ききれないときは2枚目を用いること)。

音響というものは、私たちがこれを聴いた場合、私たちの中にある特定の感覚とか心情をよび起こすものですが、この心情には二つの種類があります。一つは、その音響それ自体がもつ直接的なものであり、いま一つは、その音に付随した連想に基づく印象です。このように私たちが一つの音を聴いた時、自分の中に生まれた印象が、直接的なものなのか、また連想によるものか、それとも両者の結合されたものであるのかということを見極めることはかなり困難ですが、このことは、音楽を鑑賞する態度の上で重要な因子となるものなのです。

今、一つの火薬の爆発音を例に考えましょう。火薬の轟音には誰も不安な衝撃的な印象を受けるものですが、春の行楽の知らせのためや、または夏の納涼会に打ち上げられる花火の音には、同じ爆発音でありながら実に平和な、なごやかな感呼び起こされましょう。この場合、不安な衝撃感の方が直接的な歪められないそのものの効果なのであって、花火なんぞに受ける平和感の方は、明らかに連想に基づくものなのです。このことは花火の音に驚く鳥とか、動物とか、花火の美しさや楽しさの連想をもち得ない嬰兒の反応を見れば明らかです。

この場合は意識も何もない単なる音響ですから、動物や嬰兒の反応を見るだけで、その本来の直接的印象がどのようなものであるかを知るのは極めて簡単ですが、心情の喚起を目的として作られた楽音、すなわち寺院の鐘、教会のチャペルなどとか、人間の高度の意識によって楽音を組み合わせ作り上げた音楽作品の印象となると、問題はそう簡単に参りません。

(中略)

私たちは音楽の印象を述べる場合、適当な表現法が見つからないので、他の連想的な言葉を借用します。これ以外に今のところ適当な方法がないのです。強弱高低の音響語や、感情語は仕方ないとしても、黄色い声とか明るい音楽というような視覚、甘いという味覚、柔らかいという触覚、冷たいという温度感覚、香り高いという嗅覚などのすべての感覚語を濫用し、それらはあまりに数多く、ほとんど枚挙に暇ないのですが、これらの感覚語のみで表わせなくなると、風景とか情景とか、または宗教とか哲学、文学、詩、なんでも引き合いに出してくるのです。

このような表現法にのみ触れているうちに、連想的な鑑賞態度に傾くことになるのではないかと、とも思われます。

北に住むアイヌ民族には、変形した感覚語や擬声語(オノマトペ)を用いずに、音響からくる直接効果を示す独立した言葉が百種以上もあって、この点に関しては極めて合理的な言語をもっているといえます。

連想的な鑑賞態度が一般化している他の一つの理由は、私たちの、伝統的な民族音楽のほとんどすべてが、文学や詩と結合してきたことにもよるのです。文学的な特定の立場をもたない音楽は数えるほどしかありません。琴における六段などが、その稀な例の中に入ります。

(中略)

ですから、すべてこのような音楽に触れてきた私たちは、純粋に音楽的な作品に接すると、その音楽が何を示しているかを知らうと、努力するようになるのです。そうして、もし自分の満足のいく答が出ない場合には、その作品を理解し得ないと思ひ込むのです。

「鳥の鳴く声を聴いて誰もその意味を聞こうとしない。それで、聴いて楽しいではないか、それなのに何故、自分に向かって作品の説明を求めるのだろう」これは画家ピカソの言葉なのですが、むしろ音楽の場合にこそいわれていい言葉なのです。

(伊福部昭著『音楽入門』2003年発行より)